

虚をおのれの中心に据えること、これはヨーロッパ人にはすごく理解しにくい考え方だろう。だからヨーロッパの人はラカンを読んでびっくりするのだ（ラカンの言ってることって、平たく言えば、要するに「自我の中心にあるのはボケナスである」ということだもんね）。

自由であるというのは、ひとことで言えば、人生のさまざまな分岐点において決断を下すとき、誰の命令にも従わず、自分ひとりで判断し、決定の全責任を一人で負う、ということに尽くされる。

他人の言葉に右往左往する人間、他人に決断の基準を訊ねる人間、それは自由とは何かを知らない人間である。そのような人は、ついにおのれの宿命について知ることがないだろう。

甲野先生は人も知る座談の名手である。

とくに伝説的武術家の逸話を語るときの間の巧みさ、佳境に入るときのテンポのよさ、最後のサゲの切り上げ方などは、もう天性のものとしか言いようがない。

「こんな話でよかったら、朝までしますよ」と先生は笑われるが、実は、こういう「逸話」を一節通して**語る**というのは、「ほんとうにたいせつなこと」を教える上で非常に効果的な「教育」方法なのである。

なぜ「合気道」と言うのかといいますが、「合気する」という武術の用語があるので**す**。「拍子を取る」とも言います。

相手の身体の生命リズムを「見切って」、それに「乗って」仕事をする、ということではないかというのが私の考えであります。

「合気される」というのは武術的には「負ける」ということでありますから、武術的な身体運用においては、どうやって「合気されないか」、つまり、自分の身体リズムをどんなふうに「乱調」させておくか、どうやって自分の身体を「ラングマイズ」するか、ということがたいせつになってくるわけです。

私のように週に三日程度、二、三時間の稽古時間しかもてない上に資質凡庸な武道家は、一人稽古において「**何のためにこれをするのか**」という明確なプログラムを立ててゆかないと、**とても生きているあいだにめざす境地にはとどかない**のである。

ああ、もっとお稽古がしたい。

剣や杖は人間の身体にとって「負の条件づけ」として与えられている。

普通の人は、剣や杖は「手の延長」であり、要するにリーチが長くなって、**打突斬撃**の可能性が広がる「便利な道具」であると考えがちである。

これは間違いである。

剣や杖は「手の延長」ではない。

剣や杖が「手の延長」として使えたら、もう達人名人の位である。剣の切先で鼻毛を切り、杖の先端でドアのノブが回せるようになれば、もう古今無双である。

例えば剣を**佩刀**（はいとう）していると、私たちはある種の姿勢を取ることができない（なにしろ左後方に二尺以上も「でっぱり」があるのだから）。歩くときも、立つときも、坐るときも、剣が腰間にあるという条件づけがつねに私たちの挙措を限定する。抜刀したあとも同様である。うかつなところに剣を擬したら、指は落ちる、掌には穴があく、頸動脈は切れる……もう大変である。剣を持つということそのものが私たちの「自然な動き」を許さない。「では……」というので、剣を中心に考えて身体を動かせば、剣が主となり、身体が従となる。

では、どうするか。

あとは、剣に「和す」、剣と「対話する」という「共存の道」しか私たちには残されていない。

いまから三十年前、私自身が大学の空手部で稽古をしていたとき、先輩たちは私に繰り返して「バカになれ」と言い聞かせた。考えるな、言挙げするな、理屈をこねるな、言われたとおりのことを黙ってこなせ、という伝統的な稽古方法がそこでは連綿と受け継がれていた。

「なぜこのような稽古をするのか、それはどのような技法的課題に対処するものなのか、これらの稽古をつうじて**私たちはどこへ向かっているのか**」という問いを発するものはそこにはいなかったし、もちろん答えてくれるものもいなかった。せいぜい「次の**大会で何位以内に入る」というような日程的な目標が（ややパセティックな口調で）示されるだけだった。

しかし、それは私にはどう考えても「武道修行の目標」とは思えなかった。

私はその後もいくつかの武道を経験したが、稽古している現時的な技術上の課題の「意味」と、修行の究極の「目的」とを統一的な枠組みのうちで語ってくれる指導者に出会うことはできなかった。ときには「不動心」とか「心技体の一致」とか「劍禅一如」とかいう言葉で包括的な解答を試みようとする人もいたけれど、その言葉が技術的に何を意味するのか、人間としての生き方にどうかかわるのかについては私ははっきりしたことは分からなかった。

ここに欠けているのは、私たちが「私は今修行上のどの段階にいて、どこへ向かっているのか」を理解させてくれる「マッピング」の言語である。

翌一九四六年、大日本武徳会が GHQ の指導で解散

させられ、ついには社会体育における「武道」という名称の使用さえも禁じられるに至った。

剣道家たちは剣道をスポーツ化した「**しない競技**」というかたちで術技の延命をはかった。

形稽古は取り受けが決まっており、手順も決まっている。たしかに攻撃は厳しく、正しく応接せず、攻撃を受け損なうとけがをすることもありうる。しかし、それでも手順は決まっている。その意味では形稽古は「実戦」とまったく別のものである。では、**一体形稽古は修行者に何を学ばせようとしているのか。**

この問いこそ、私が冒頭に掲げた「**この修行を通じて、私たちはどこへ行こうとしているのか**」という問いそのものである。その答えを知るためには、武道の根本原理から考え直さなければならない。以下、私たちはいささか思弁的な議論のうちに踏み込んで行くことになる。

武道の根本にある原理は、武道は勝つことを欲望する主体の廃絶を目指す、ということである。「勝つことを欲望する主体」とはすなわち武道家のことであるから、これを言い換えると、「**武道は武道家の消滅を目指す**」ということになる。

・・・

「**武道の科学**」とは、「私はいま修行上のどの段階におり、いかなる技法的課題に直面しているのか」という技法的な問いと、「私は武道を通じてどこへ行こうとしているのか」という原理的な問いを統一的な枠組みのうちで、一義的な言語で語ることを可能にする学知である、と先に私は書いた。本論考はそのような学知を「希求する」試みの一つである。ここでは「居着き」と「起こり」という技法的な難点を武道の根本原理と連関づけて解くことを試みた。繰り返し言うとおり、これは私の現在の稽古段階において前景化している問題に対する限定的解答にすぎない

術理

「**ナンバ**」とは、歩くときに、同じ側の手足を出す歩行法で、いまでも相撲や能楽などに見ることができる。明治になって西洋風の歩行法が導入されるまで、日本人はずっとそのようにして歩いてきた。

・・・

明治十九（一八八

六）年、ときの文化大臣森有礼による全国の教育機関への兵式体操の導入の目的は「ナンバ」の矯正、すなわち日本人固有の身体運用技法の清算にあった、と三浦雅士は指摘

じている。

日本の伝統的な身体観はよく「心身一如」と言われる。まさしく「心身一如」であるからこそ、精神的なストレスが身体的な運動能力に影響を与えるということも起こりうるわけである。

しかし、武道にとって大事なものは、そのような心身の連関を、事実として認知することではない。そうではなくて、武道の課題は、どのようにしてこの心身の連続を断ち切るか、どのようにして精神的なプレッシャーを身体に反映させないか、という技術的な問題にある。

形稽古を「形をなぞって身体を動かすこと」「段取りの決まったシミュレーション」と考えている人がいるかも知れないが、それでは形稽古の意味が理解できない。

形稽古は、「心理的には反応せず」しかし「身体的には反応する」という木人的な動きを身体に刷り込んでゆくために工夫された身体訓練法である。

晶文社から『「おじさん」的思考』の初校ゲラが届く。

一気に読む。

おおお、なんて面白いんだ。

自分が書いたものを読んで「ほお」とか「ああ」と言うのは私の悪癖であるが、それにしても面白い。

私だったら絶対買う。

だって、私が言いたいことが私の生理にぴったりの文体で書いてあるんだもん（これ、前にも書いたな）。

しかし、つまらないところも散見される。

私ほど「ウチダの書き物」に対して好意的な読者が読んで「つまらない」というのは、相当に「つまらない」ということである。

さっそくそこを全面削除する。

削除すると頁数が減るので、書き足す。

ばりばり書き足して、真数を合わせる。

夕食（ダイエット中だからいつものとおり「厚揚げとコンニャク」）を食べながら、もう一度読み返す。

二度読んでも面白い。

「おお、このあとどうやってこのデタラメ話を着地させるんだ？」とときどきしながら読む（さっき読んだばかりなのに）。

まったく幸福な人間である。

自分の書いた本を自分で読んでわくわくできるんだから。

しかし、これほど面白い本を読んだのは小田嶋隆の『仏の顔もサンドバッグ』以来で

ある。

自画自賛のあいまを縫って『ミーツ』の五月号の原稿を書く。

「仕事について」という論題が決まっている。

編集長の江さんからは「若い連中に一つば一んと説教かまして下さい」と言われているので、そのご趣旨に添わないといけない。

かつて結婚していたころの私の妻たる人は「病気になるのは生き方が間違っているから」という実にきっぱりとした正論をお持ちの方であった。

それゆえ、私が病気になると、それがどのような人格的欠陥に由来するものであるかを容赦なく、徹底的に指弾してくれた。

もちろん「看病」などということはなされるはずもない。

なにしろ、病気はおのれの生き方の間違いに気づき、「二度と病気にはならないぞ」という反省をするための機会なのであるからして、徹底的に不快な経験として記憶されねばならぬのである。

おお、なんという教化的なご配慮であろうか。

妻の献身的な教化の功あってか、私は「病気になると、病気になって具合が悪い上に、妻に死ぬほど説教されて、いっそう具合が悪化する」という二重苦が待っているから、死んでも健康だけは維持せねば」と懸命の努力で体調を保ったのであった。

そのような鬼軍曹的看護者を失ったあとの十二年間、**私は主夫をしていた**ので、娘の世話をするために一日たりと家事を休むわけにゆかなかった。そのせいで、これまためったなことでは病気になることができなかった。

そして、ようやく娘が去り、私一人になって、思う存分病気になれる身分となったのである。

だから、太古以来、**子どもの身体**

訓練において最優先に開発されたのは「危機を感知する能力」だったはずである。不安や恐怖や逡巡といった身体反応がどういう場合に生じるのかを知り、そのわずかな徴候に基づいて行動パターンを臨機応変に変更することのできる個体が生き延びる確率の高い個体だからである。

そのような能力開発プログラムは子どもたちにまず「遊び」として提示されただろう。

「かくれんぼ」や「鬼ごっこ」や「ハンカチ落とし」や「缶蹴り」などは、すべて「目に見えず、耳に聞こえないで接近してくる邪悪なもの」をいち早く感知し、反応するためのレッスンである。そこで優先的に開発される資質は、走力や腕力ではない。

考想

対立するものを対立したまま両立させることが「術」である、ということを前に甲野書紀先生から伺ったことがある。

自己決定や自己責任という言葉をもっと軽々しく口にしますが、自己決定・自己責任というのはものすごくストレスフルな経験なんだということがもっとアナウンスされてもいいと思います。ふつうの健常者でさえ、自己決定・自己責任の重圧で病気になるというのに、病気になった人間にさらにそれを要求できますか。

そのキツさのなかで、どうやって仕事をしていくのか、ということになると、基本的には、その人のやっている仕事についての、承認と共感と敬意があれば、かなりハードな負荷にも耐えられます。ですから、バーンアウトが多いということは、ナースの現場に承認と共感と敬意が足りないということでしょう。

余人

合気道は植芝盛平先生（一八八三—一九六九）によって創始された近代武道である。合気道と他の競技武道とのもっとも際だった違いは「試合をしない」という点にある。私の身体技法上の知見はこの「試合をしない、強弱勝敗を論じない」という合気道の特殊性をどう理解したらよいのかという長年にわたる宿題に解答することを初発の動機としている。

それ以上は身体がもたないという。

そうだろうと思う。だって、シテには死霊が憑依するんだから（能というのは八割方「そういう話」である）。

私程度の素人でさえ、舞の稽古のさなかに、先生のあしらいが激しくなると軽いトランスに入ることがある。まして装束をつけ、面をつけ、地謡と囃子にあおられて能舞台を歩んでいけば、「あっち」へ行ってしまうのは当たり前である。

それに「あっち」へ行けないような能楽師では見所（けんしょ）に感動は与えられまい。多田先生は、武道家は「トランスできる体質」でないと大成しないとおっしゃったことがある。